

糖尿病患者さんに寄り添う

ピープル薬局 実習生
摂南大学 平嶋 未佳

糖尿病について気になったきっかけ

- ・糖尿病の患者さんが多く来局されている。
→糖尿病について学ぶ。
- ・糖尿病の治療には血糖値をコントロールすることが重要。
→血糖値が高いのは危険だが、低すぎるのも危険。
→低血糖に興味を持つ。
- ・糖尿病治療薬は種類が多い
→その中でどの薬がどれほどの割合で使用されているか。

調剤後薬剤管理指導加算について

糖尿病治療薬の適正使用（**低血糖予防**）を推進するため、
薬局が調剤後も副作用の有無の確認や服薬指導等を行い、
その結果を医師に情報提供した場合の評価。

※地域支援体制加算を届け出ている薬局のみ

→加算対象になるほど低血糖管理は重要である。

低血糖について

糖尿病治療薬の副作用の一つ。

血糖値がおよそ70mg/dL未満になると現れる身体症状。

冷や汗、手足の震え、ふらつき等が現れる。

50mg/dL未満になるとけいれんや昏睡の恐れ。

不整脈や狭心症の誘発・悪化の危険性も。

→患者さんが自覚し、対策することが重要になる。



低血糖を放置していると
ふらつきによる転倒や
昏睡やけいれんの危険性
不整脈などが誘発されてしまう恐れ



患者さんが低血糖について
知っているると予防することができる



果たしてどれほどの患者さんが
低血糖についてを知っているのか
対策をしているのか
なった場合どのような健康被害があったか



調査方法

- ・対象

糖尿病治療薬が処方されている患者さん。

- ・質問内容

①低血糖になったことはあるか

②低血糖になったときの対策は知っているか

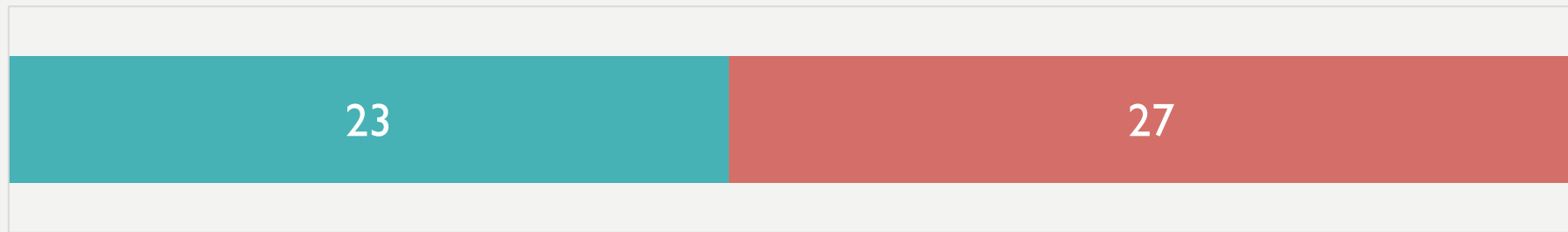
- ・処方されている薬を種類別に統計

質問させて頂いた方々について

- ・計50名の患者さん。

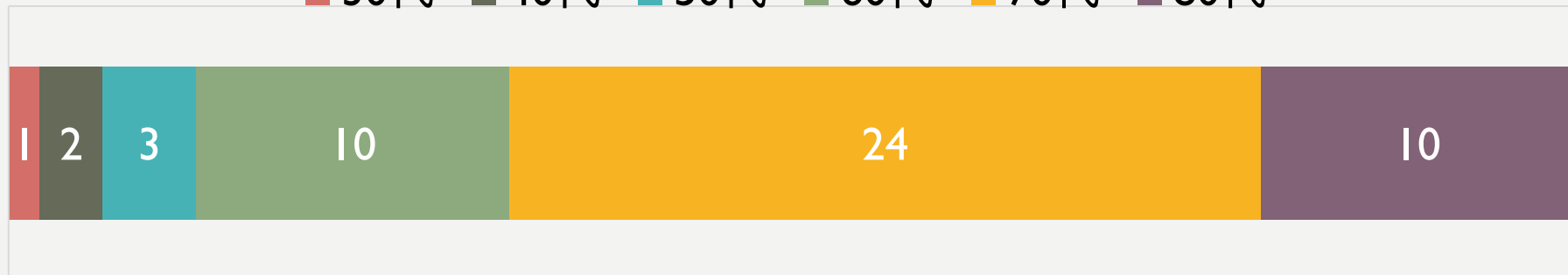
性別

■ 男性 ■ 女性

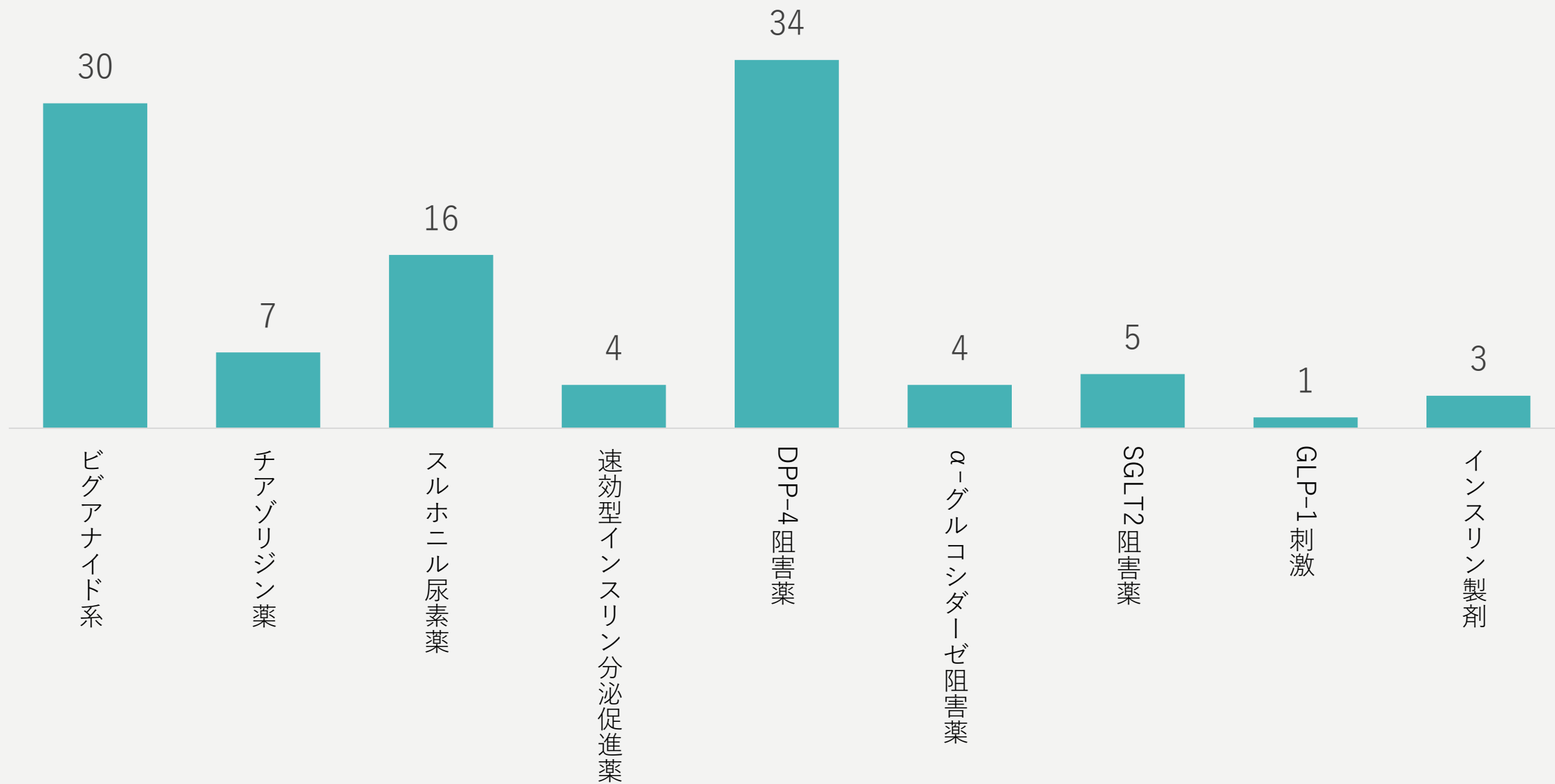


年代

■ 30代 ■ 40代 ■ 50代 ■ 60代 ■ 70代 ■ 80代

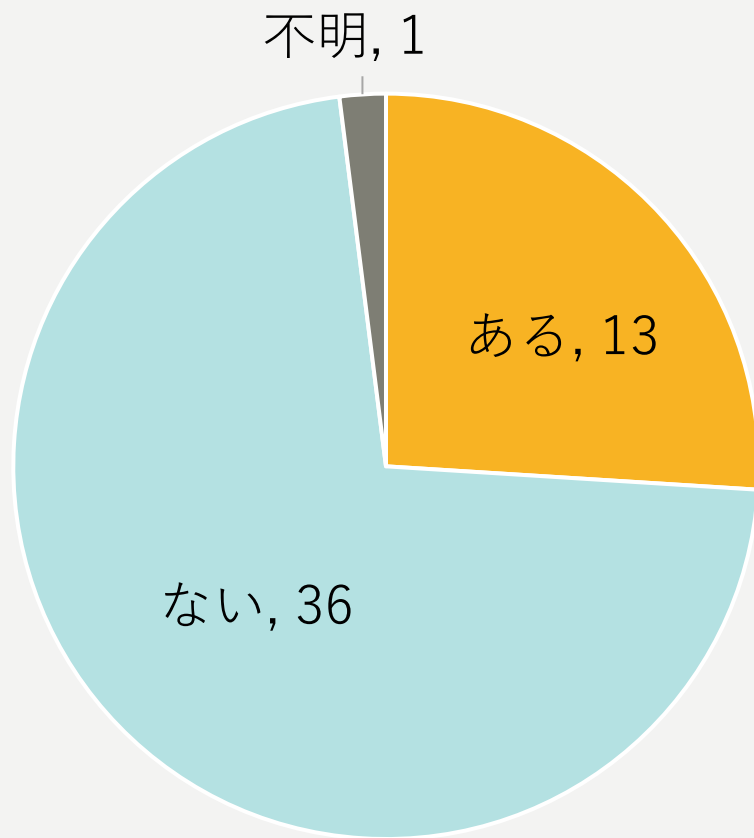


使用されている薬

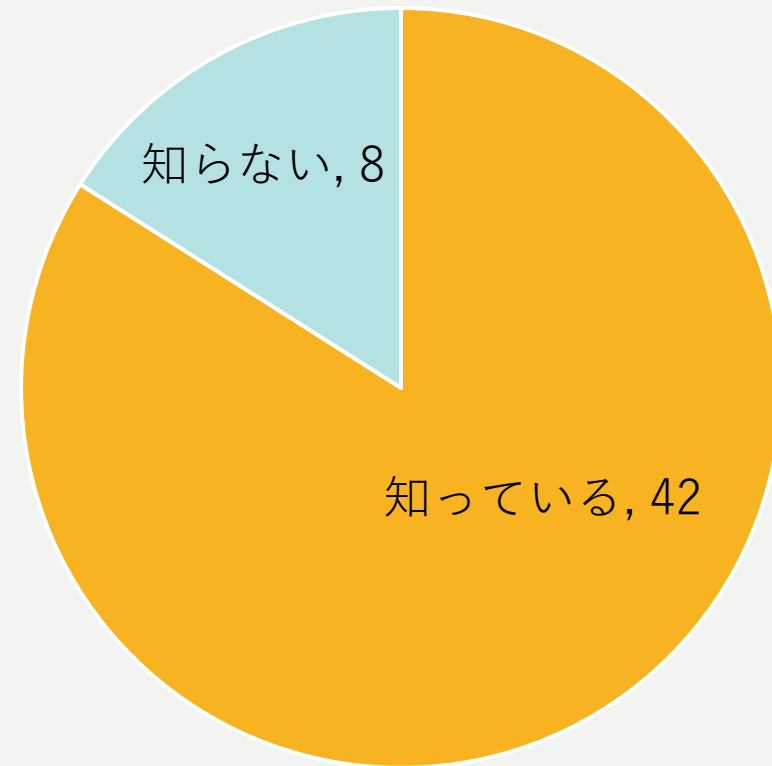


結果

低血糖になったことが



低血糖の対策を



低血糖の経験談

- ・薬が変更される前は、買い物の中でよくなっていた。
- ・インスリンしか薬がなかった時、血糖値が高いと言われるのが嫌で診察日の朝食を抜いた時にふらつきが起こった。
- ・動けなくなり救急車で搬送されたことが2度あった。
- ・今も月に一回、空腹のときに手がしびれる。
- ・食事時間が遅れたりすると、ふらついたりぼんやりする。
- ・ダイエットが楽しくなり食事制限をした時に、家の周りが分からなくなるほど意識が朦朧とした。

知らなかった方について

- ・ 低血糖をまず知らなかった人数→9人

低血糖の対策と知らずブドウ糖を持ち歩いている方も・・・

- ・ 理由としては

かなり昔に指導してもらったので忘れてしまった。

なったことがないから。

低血糖らしい症状は出たことがあるが、気にしていなかった。

まとめ

- ・ DPP-4阻害薬などの開発により、インスリンやSU薬による治療が中心の時より低血糖になる危険性が低くなっている。
- ・ 低血糖は空腹時に起こることが多く、重篤な場合は救急搬送されていることやどこにいるかわからなくなるほど意識が朦朧とする。
- ・ 薬剤師や医師による指導を行っていても、経験がない、自覚がない人は覚えにくい傾向がある。

結論

低血糖になったことが無い為、低血糖を知らない、ブドウ糖などを
持ち歩いていない患者さんが一定数いる。



服薬指導で低血糖の症状が起こっていないか質問し、患者さんを
低血糖のリスクから守るようにする。

薬局の役割

今回、糖尿病から患者さんを見たことで、
高血圧、脂質異常症といわれる他の生活習慣病にも着目し、
患者さんの健康寿命に係わっていくことが大切と感じました。

現在は人生100年時代とも言われています。
薬局はこれから健康をサポートする役割を担って、
健康寿命を延ばすため患者さんを支えていく必要があります。